

昔むかし、ある男の人に、息子が三人ありました。上のふたりは、いつも自信満々で、世の中は自分たちのためにあるのだと思っていました。そして、末っ子のハンスに仕事をおしつけては、笑いものにしました。

あるとき、兄さんたちは、広い世間へ出て行こうと思いました。そこで、父親に、

「どうか、馬と馬具と、それから、りっぱな服をください。ぼくたち、世間を見て来たいのです」といいました。父親は、

「いいとも。幸運に出会うように祈っているよ」といいました。すると、ハンスが、

「ぼくもいっしょに行きたい」といいだしました。父親は、

「まずは兄さんたちに行かせよう。おまえのことは、あとで考えてやるから」といいました。

兄さんたちは、りっぱな服を着て、たくましい馬に乗って、別れのあいさつをしました。中庭に出ると、ハンスがやってきました。ハンスは、ふだんの服で、おいぼれ馬に乗っていました。

「おまえ、いったい何しに来たんだ」と、兄さんたちが聞くと、ハンスはいいました。

「ぼくも、広い世間へ出て行こうと思うんだ」

「へえ、お姫さまと王国の半分でも手に入れるつもりか」

「いいや、それだけじゃなくて、もっと別の物も手に入れるんだ」

兄さんたちは、ばかにして笑いました。そして、中庭のかしわの木に、それぞれの短剣を突き刺していいました。

「帰ってきたら、この短剣を引きぬくんだ。そして、だれが一番の幸運を手に入れたか、くらべてみよう」

ハンスは、兄さんたちの短剣のとなりに、折れたナイフを突き刺しました。すると、兄さんたちは、ハンスを置き去りにして、馬をとばして行ってしまいました。

兄さんたちは、大きな森の奥深く進み、野原を越え、また大きな森に入って行きました。すると、大きなたきぎのたばをかついだおばあさんに会いました。おばあさんは、

「おまえさんたち、何か食べ物をくれないかい。とてもつかれて、お腹がすいているんだよ」といいました。ふたりは、

「自分の分しか持っていないよ」といって、手伝おうとも、食べ物をやろうともしないで、行ってしまいました。

いっぽう、ハンスは、美しい木をながめたり、小鳥の歌に聞きほれたりしながら、いい気持ちで歌いながら馬を進めていきました。

大きな森の奥深く進み、野原を越え、森の中に入って行くと、たきぎをかついだおばあさんに会いました。ハンスは、

「おばあさん、そのたきぎをおよこさない。このおいぼれ馬に背負わせるから」といいました。おばあさんは、ハンスを見上げてにっこりしました。

「おまえさんは、なぜ私を手伝ってくれるんだね」

「ぼくは、人が困っているのを見ちゃいられないんだ」

ハンスは、持っていたパンを半分に分けて、おばあさんにあげました。ふたりは、道端に腰をおろして食べながら、楽しくおしゃべりしました。食べ終わると、たきぎを馬に乗せて、おばあさんの家に運びました。

おばあさんは、

「今日はお手伝いしてもらったから、お礼をあげよう」といいました。

「何もいらないよ」とハンスがいうと、おばあさんは、

「今は何もいらないと思うけどね。でも、いつか私の贈り物をもらっというてよかったと思うときがくるよ」といって、ハンスに笛をひとつくれました。そして、

「悪いやつに出会ったら、この笛でそいつにさわるといい。そうすると、そいつは死んでしまう。でも、ほかにどうしようもないときだけ、そうするんだよ」といいました。

ハンスは、笛をポケットにしまって、また馬に乗って歌いながら旅を続けました。

つぎの日、ハンスは、宿屋にやってきました。ハンスが食堂に入ると、兄さんたちが、みずぼらしいぼろ服を着てすわっていました。ハンスは、びっくりして、

「おや、兄さんたち。そんなかっこうはどうしたんですか」とたずねました。兄さんたちは、

「悪いやつらにだまされたんだ。おまえ、ぼくたちを助けてくれ」といいました。そして、ハンスの服と馬を、自分たちのと取りかえてほしいと頼みました。ハンスは、気の毒に思っ

て、自分の服を兄さんたちにわたし、代わりにぼろぼろの服をもらいました。

兄さんたちが、馬も連れて行ってしまったので、ハンスは兄さんのおいぼれ馬に乗って、

旅をつづけました。

夕方、ハンスは広い草原にやってきました。ここでは、年とった羊飼いが、たくさんの羊を追っていました。ハンスは、羊飼いのおじいさんに、

「お手伝いしましょうか」と、声をかけました。羊飼いのおじいさんは、よろこんで、

「手伝ってもらえるならうれしいよ。そうしたら、今夜はわしのところに泊まってもいい。

夕ご飯のパンもあげるし、あしたの朝のパンもあげるよ」といいました。

おじいさんは、王さまの宮殿の羊飼いでした。ハンスは、羊の群れを宮殿の中庭に追いかむの手伝ってやりました。

おじいさんは、ハンスといっしょに夕ご飯を食べながら、どういうふうに生きて行ったらいいか話して聞かせてくれました。

「いつも正直でいて、困っている人を助けるように。そうすれば、どんなことでも、きつとうまくいくだろう」

つぎの朝、おじいさんは、ハンスに、

「しばらくここにいて、わしを手伝ってくれないか」といいました。

「いいですとも」と、ハンスは答えました。おじいさんは、ハンスにいいました。

「じゃあ、羊に草を食べさせに行っておくれ。牧草地は三つあるが、その牧草地へ行ってはいけない。牧草地の手前に大きな野原があるから、そこで、羊に草を食べさせるんだよ。羊たちが牧草地へ行かないようによく気を付けるんだ。牧草地には、それぞれ大きな石の塚があつて、塚にはひとりずつ巨人が住んでいる。見つかったら、巨人は羊をとりあげて、おまえさんをなぐり殺すだろう」

ハンスは、

「ぼくは、そんな所まで行きませんよ」といいました。そして、馬に乗って、羊の群れを追って、野原へでかけて行きました。

一日が過ぎ、二日が過ぎ、何もかもうまくいきました。ところが、やがて、羊たちが野原の草を食べつくしてしまいました。ハンスは、

「牧草地に行ったところで、そんなに悪いことは起こらないだろう。羊には草が必要だもんな」と考えました。そこで、羊を牧草地に入れました。羊たちは草を食べ、ハンスは歌いながら思いました。

「ここには、巨人なんかいやしない。ばかげたお話さ」

そのとき、石の塚の中で、オルルルと、うなり声がしました。

「いったい何だろう」と思ったとたん、巨人があらわれました。巨人は、大きな頭をしていて、額の真ん中に、目がひとつだけありました。巨人は、わめき声をあげました。

「なんということだ。おまえは、羊を連れてここへ入ってきたのか」

「だって、ここには草がいっぱいあるじゃないか」

「ふん。それなら代わりに羊を一匹いただこう。くれなきや、おまえをなぐり殺すぞ」

そこで、ハンスは、一番やせっぽちの羊をさしました。巨人が羊につかみかかったとき、ハンスは、おばあさんにもらった笛を思い出しました。ハンスが、笛を取りだして巨人にさわると、巨人は倒れ、大きな頭が地面にぶつかって死んでしまいました。

「へえ、おばあさんの贈り物は、すばらしいぞ」と、ハンスは思いました。そして、羊たちにお腹いっぱい草を食べさせてから、宮殿に帰っていきました。

ハンスは、年とつた羊飼いに、牧草地に入って行って、巨人をやっつけたことを話しました。羊飼いは、

「それは、よかった。わしらは、あの三人の巨人にどんなにいじめられたことか」といって、よろこびました。そして、

「二番目の塚にいる巨人は、もっとたちが悪いから、気を付けるんだぞ」といいました。

まもなく、ハンスは、二番目の牧草地に入って行きました。あんのじょう、巨人がうなったりどなったりしながらあらわれました。巨人には頭がふたつあって、それぞれの頭に目が三つずつついていました。巨人は、あばれまわっていいました。

「羊を一匹くれなきや、おまえをなぐり殺すぞ」

ハンスが一番やせっぽちの羊をさしだすと、巨人はかんかんにおこって羊につかみかかりました。ハンスは、笛で巨人にさわりました。巨人は、倒れ、ふたつの大きな頭が地面にぶつかって死んでしまいました。

それからまもなく、ハンスは、三番目の牧草地に行きました。すると、すぐに、三番目の巨人が現れました。巨人には、頭が九つあって、それぞれの頭に目が三つずつついていました。そして、雷かみなりのような声でさげびました。

「羊を一匹くれなきや、おまえをなぐり殺すぞ」

ハンスが一番やせつぽつちの羊をさしだすと、巨人は羊につかみかかりました。ハンスは、笛を取りだして巨人にさわりました。巨人は、倒れて死んでしまいました。

ハンスが宮殿に帰ってくると、あたりのようすが、いつもとひどく違ちがっていました。窓まどにはすべて黒いカーテンがかけられ、人びとは、みな、黒い服を着て、泣なきながら歩き回っていました。年とった羊飼かひいもすっかりうなだれていました。ハンスが、

「いったい何が起こったのです」とたずねると、羊飼かひいはいいました。

「海の方かたこうに巨人のかしらがいて、そいつが、お姫さまをよこせといつて来たんだ。よこさなければ、海岸の生き物はみななぐり殺し、大きな高波たかねを起こして、人びとをみなごろしにするというのだ」

「そいつはそんなに大きな力を持つてるんですか。とても信じられません」

「ほんとうなんだよ。一週間たったらお姫さまをよこせといつてるんだ」

「じゃあ、一週間は考えるひまがあるわけですよ。もう寝ねましよう。明日という日がないわけじゃなし」

一週間たつて、お姫さまが海の巨人にひきわたされる日になりました。その日、ハンスは、一番目の牧草地に羊を連れて行きました。そして、塚の中に入ってみると、そこに、すばらしく美しい茶色の馬がいました。そばには、美しい銅くわの鞍くらとよろいがあって、刀が置いてありました。もつと中に入つて行くと、銅貨どうがでいっぱいいっぱいの箱はこがありました。

「巨人はもういないんだから、これはみんなぼくのものだな。お姫さまを助けられないか、運試うんししてみよう」と、ハンスは考えました。

夕方、お姫さまは、海岸に連れて行かれました。ハンスは、塚に行き、よろいをつけてサベルさべるを持ち、馬を走らせて海岸に行きました。海岸では、お姫さまを中にして、王さまやお妃おひめさまや、国じゅうの人たちが集あまって泣ないていました。

そのとき、海の中から巨人があらわれました。

「さあ、さつさと姫を連れてこい。約束やくそくの時間だ」と、巨人はさげびました。ハンスは、お姫さまに近寄ると、馬にひきあげ、自分の後ろに乗せました。それから、巨人に向かつて走つていって、大声で、いいました。

「さあ、連れてきてやったぞ。しかし、おまえはおれがだれだか知っているのか」
そして、

「この馬を見よ、おれはお前の末の弟をやつつけたのだ」と、ハンスがさげぶと、巨人は、ちぢみあがって海に沈しずんで行きました。

ハンスは、みんなの所にもどりましたが、それがハンスだとは、だれにも分かりませんでした。お姫さまは、馬の上で、こつそり、ハンスの巻まき毛に自分の指輪を結びつけました。王さまやお妃たちは、大喜びしましたが、気づいた時には、お姫さまを助けた騎士きしは、馬をとばして行ってしまうって、どこにも見つかりませんでした。

何日かすると、また巨人があらわれて、一週間後にお姫さまをよこせといっけて来ました。

ハンスは、二番目の塚に行ってみました。そこには、前よりもっとりっぱな白馬がいました。鞍もよろいも、銀できていました。奥の部屋には、銀貨のつまった箱が置いてありました。ハンスは、

「もういちど、運試ししてみよう」と思いました。

夕方、みんなが海岸に集まっていると、巨人があらわれました。そこへ、白い騎士があらわれたかと思うと、お姫さまを馬に乗せて、巨人に向かって走りました。そして、

「この馬を見よ。おれは、おまえの二番目の弟もやつけたのだ」とさげびました。巨人は、腹を立てましたが、恐おそれをなして、海に沈んでいきました。お姫さまは、また、ハンスの巻き毛に指輪を結びつけました。

お姫さまをみんなの所に連れもどすと、ハンスは、たちまち、馬をとばして行ってしまいました。

それからしばらくして、また、巨人が、お姫さまをよこせといっけてきました。そして、これが最後だ、お姫さまをよこさなければ国全体に災難さいなんをもたらしてやるといいました。

一週間後、ハンスは、最後の塚に行ってみました。そこには、元気のよいりっぱな黒馬がいました。鞍もよろいも、金できていました。奥の部屋には、金貨のつまった箱が置いてありました。ハンスは、

「どうもぼくは、お金持ちになる運命のようだ」と思いました。

夕方、お姫さまと王さまたちは、海岸に集まってみんなで泣いていました。そこへ、海から巨人があらわれました。みんなは恐ろしさにふるえました。そのとき、金色の騎士が、黒い馬に乗って走って来ました。騎士は、お姫さまにいいました。

「わたしの後ろにお乗りなさい。あなたの力になれるかどうかやってみます」

お姫さまは、馬に乗ると、騎士の巻き毛を見ました。そして、ふたつの指輪のとなりに、もうひとつ、指輪を結わえつけました。

海の巨人は、こんどはどンドン近づいてきて、お姫さまにつかみかかろうとしました。ハンスは、あの笛を取りだし、巨人に向かって突きつけました。笛が触れたとたん、巨人は波の中に沈んでいって死んでしまいました。

ハンスは、お姫さまを連れてもどると、またもや馬をとばして行ってしまいました。

王さまは、お姫さまを救ってくれた騎士にお礼をいいたいと思いました。そこで、国じゅうに、こんなおふれを出しました。

三度にわたって姫を救いだした者よ、名乗り出よ。

王国の半分をあたえ、姫と結婚させよう。

たくさんの男たちが、群れをなしてお城にやってきました。王さまとお妃さまとお姫さまは玉座にすわり、その前を、男たちがひとりずつ歩いて行きました。お姫さまは、男たちの髪を見つけていましたが、指輪をつけた巻き毛の騎士を見つけることはできませんでした。そのうちに、宮殿にやってくる男はだれもいなくなりました。

お姫さまは、悲しみました。そして、ある日のこと、宮殿を出て、牧草地へと歩いて行きました。そこで、みすぼらしい若い羊飼いに会いました。羊飼いは、

「こんなところで何をなさっているのです」とききました。お姫さまは、

「わたしは、巨人からわたしを救ってくれた騎士をさがしているの。あの人を見つかるまでは帰らない」といいました。そして、また先へと歩いて行きました。

ハンスは、黒い馬にまたがり、黄金の騎士となって、宮殿に行きました。王さまは大喜びしました。そして、家来に命じて、お姫さまを探して連れ帰らせました。

盛大な結婚式があげられました。ハンスは、その国をついで新しい王となりました。

ある日のこと、ハンスは、いちど、ふるさとの村に帰ってみたくなりました。そこで、ハンスは黒い馬に乗り、お姫さまは白い馬に乗って、父親の家へと向かいました。

中庭に馬を入れると、父親とふたりの兄さんが出て来ましたが、この王さまがハンスだとは気がつきませんでした。ハンスは、かしわの木から折れたナイフを引きぬき、

「これはぼくのものだ」といいました。そこで初めて父親はこれが自分の息子だと分かりました。兄さんたちもおどろいて、

「あのうすのろが、この国の王だなんて」といいました。

ハンスは、父親と兄さんたちを宮殿に連れて帰りました。

ハンスは、国をうまく治め、だれもかれもが豊かに暮らせるようになりました。

これでお話はおしまい

村上郁再話

資料『世界の民話3 北欧』 榎田照男訳／ぎょうせい